

姜 誠

Kang Song

シリーズ
ここで生きる

またがりビートの すすめ

「外国人」をやっていると見えること

シリーズ

ここで生きる



またがりビトのすすめ

「外国人」をやっていると見えること

mei song

姜誠
Kang Song

岩波書店

姜 誠

1957年山口県生まれ(在日コリアン三世)。ルポライター、コリア国際学園監事。1980年早稲田大学教育学部卒業。2002年サッカーワールドカップ外国人ボランティア共同世話人。定住外国人ボランティア円卓会議共同世話人。2004～05年度文化庁文化芸術アドバイザー(日韓交流担当)などを歴任。2003年『越境人たち六月の祭り』で開高健ノンフィクション賞優秀賞受賞。主な著書に『竹島とナショナリズム』『5グラムの攻防戦』『パチンコと兵器とチマチョゴリ』など。

シリーズ ここで生きる

またがりビトのすすめ

——「外国人」をやっていると見えること

2014年11月19日 第1刷発行

著者 ^{カン ソン} 姜 誠

発行者 岡本 厚

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
電話案内 03-5210-4000
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・法令印刷 カバー・半七印刷 製本・松岳社

© Kang Song 2014

ISBN 978-4-00-028727-2 Printed in Japan

〔日本複製権センター委託出版物〕 本書を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書をコピーされる場合は、事前に日本複製権センター(JRRC)の許諾を受けてください。

JRRC Tel 03-3401-2382 <http://www.jrcc.or.jp/> E-mail jrcc_info@jrcc.or.jp

シリーズ　ここで生きる



またがりピトのすすめ

「外国人」をやっていると見えること

はじめに——またがりビトになりたい

この国に生まれてみたら、外国人だった——。

それもふつうの外国人ではない。日本は朝鮮半島を一九一〇年から一九四五年まで、植民地として支配した。その朝鮮半島にルーツを持つ、いわゆる旧植民地出身の外国人だった。

人はさまざまな理由で国境を越えて移動する。母国を離れ、異国の地に足を踏み入れた瞬間から、その人は外国人となる。

外交官やビジネスマン、留学生、出稼ぎ労働者、あるいはツーリスト。こうした人々は一定の時間、異国に在留し、所期の目的を果たせば、母国へと戻り、ふたたび本国人となる。だから、外国人として過ごす時間は長くて数年、短い人だとほんの数日間だろう。

ただ、僕の場合はいささか事情が異なる。同じ越境的移動者でも、植民地国から宗主国に渡り、定住することになった移動民の子孫だ。

父は北海道生まれの在日コリアン二世、母は一〇歳のときに韓国の慶尚南道キョンサンナムド（朝鮮半島南部）

からやってきた在日一世だった。その両親から生まれた僕は父が二世なので在日三世と呼ばれるが、厳密な意味では二・五世となる。

だから、僕は国境を越えていない。生まれた地は日本の本州の最南端、山口県の下関という港町であり、そこが故郷だ。そしてこの国で転々と居所を変えながら、日々を送ってきた。つまり、僕はこの世に生を受けたその瞬間から今現在まで、ずっと外国人としてあり続けている。

多くの場合、移民はその国の言語や文化、風習などを身につけ、統合される。その過程で参政権などの政治的権利に加え、経済的、社会的、さらには文化的市民権などがその国のルールにより、付与される。たとえば、出生地主義の国では移民の子は生まれただけで、その国の国籍が与えられ、人間が「よき市民」として、よりよい生を営むことが可能となるのだ。

しかし、日本はそうではない。

異なる人種、文化、言語を持つ越境的移動者を社会に包摂し、統合する政策やプログラムは明示されていない。

日本列島に住んでいるのは日本民族だけ――。

そんな単一民族神話がいまだに幅を利かせている。だから、外国人は未来永劫、ずっと外国人のまま生きることになる。

いや、帰化をして日本国籍を取れば、日本人になれるではないかという反論があるかもしれない。

しかし、帰化とは「君王の徳化に帰服すること」だ。その当否は日本の場合、法務大臣の裁量によって決定される。納税の実績や居住歴といった一定の条件を満たした時に、半ば自動的に認められる市民的権利などではなく、あくまでも為政者側の恣意的な判断によって与えられる恩典にすぎない。日本的な文化を身につけ、送り出し国の民族性や文化の気配を見事に消し去ることが奨励され、そのハードルをクリアした者にだけ、帰化は許されるのだ。

近代に成立した国民国家はもともと、人々をさまざまな特権の享受できる国民Ⅱ「我々」と、その特権から阻害される外国人Ⅱ「他者」に寸断する機能を持っている。

国民国家は本来、人権の担い手としての自由な個人を創りだすためのプロジェクトとして、近代の歴史上に立ち現れたはずだった。宗教的権威や封建的な身分制から人間を解き放ち、非宗教的で中立な公共空間を確立して、自由で自律的な市民社会を生み出そうとしたのだ。

しかし、実際には自国民には人権を保障しながら、外国人に対しては差別的な取り扱いをして恥じないという国際人権上のダブルスタンダードがまかり通ってきたのが、近代という時代だった。人権の不可侵性を高らかに宣言しておきながら、国民以外の人間の人権は軽視し、自

国の權益を拡大させる強欲なテリトリーゲームを繰り広げてきたのだ。その典型が戦争であり、植民地経営だった。

加えて、政治指導者をはじめ、多くの日本人は「民族的な単位と政治的な単位は一致すべきである」というナショナリズムの強固な信奉者だった。

そのため日本は、絶えず異質な他者を抱え込んで「想像の共同体」を維持発展してきた欧米などの国民国家と違って、もっぱら帰化という手立てによって新国民を均質的に同化し、単一民族による国家を実現しようと多くの努力を払ってきた。

こうなると、マイノリティである移民やその子孫は息苦しい。

この国では国民と民族の一致が自明のごとくまかり通るだけでなく、個人を尊重する拠り所となるはずの国籍はもっぱら個人を民族的価値に従属させ、人々を「我々」と「他者」に分断する道具へと矮小化されることとなってしまった。

こうした状況下、越境的移動者は国境や国籍、国家イデオロギーに切り刻まれ、あたかもジグソーパズルの断片のような存在に貶められてしまう。

自分はいったい何人なのか？　いったい誰なのか――？

自らのアイデンティティを探しあぐねて、深く思い悩んでしまうのだ。その意味で、日本と

いう国民国家やその公共空間、あるいは「日本人」という概念は排他的なナショナリズムに占拠されている。

現在、海外で暮らすコリアンは約七〇〇万人近くにもなる。その多くが居住国の市民権を取得し、定住している。こうしたコリアンはその国の本来の国民とともに、その社会を構成する「よき市民」として、公共の形成に参画している。

一方、日本に暮らすコリアンはどうだろう？

在日コリアンはすでに五世、六世が生まれるほど、日本での居住歴は長期に及んでいる。にもかかわらず、いまだに数十万人もの人々が帰化をためらい、外国人としての不利や不便を甘受しながら、生活している。これは海外に住む七〇〇万人のコリアンの中でも特異な存在である。

在日コリアンの若い世代には韓国語をしゃべれない人が少なくない。民族食であるキムチが苦手な人、同胞の友人がひとりもないといった人さえいる。

多民族国家で散見されるように、少数民族としての権利を主張し、自治権獲得や分離独立に動くということもない。その大半は日本名を名乗り、日本の公教育を受け、勤労や納税の義務を果たすなど、日本の法令を順守して暮らしている。顔つきや皮膚の色も日本人と同じモンゴ

ロイド系で、同調圧力の高い日本の社会秩序を乱すこともない。黙っていれば、日本人で通用してしまう。

ある意味で在日コリアンは、これ以上はもう同化できないというほどに日本に同化しているエスニックグループなのだ。受け入れ側の日本社会から見れば、帰化制度による統合のロールモデルと呼んでもさしつかえないかもしれない。

とはいえ、日本国籍を保持しない在日コリアンは何世になろうがしょせんは永遠の他者であり、日本の公共社会に参画することは難しい。本当なら日本国籍を取得し、国民としての権利を享受して生きる方がずっとよいに決まっているのだが、五世、六世が生まれる現在になつても、いまだに数十万人もの人々が帰化をせずに外国人のまま暮らしている。もちろん、僕もそのひとりだ。

こうした在日コリアンの態度に、「ただ単に、韓国や北朝鮮など、本国への忠誠心が高く、日本への統合を望んでいないだけではないのか」との指摘がある。たしかに、そうした考えから韓国籍、朝鮮籍を維持し続けている在日コリアンがいることは事実だ。

だけど、それは少数にとどまる。多くの在日コリアンは日本という国家や、自分が生活する地域社会に特別な関心と愛着を抱いている。なにしろ、自分が生まれ育った地域なのだ。そこ

には愛すべき友人や幼馴染み、そして風土や景色がある。それらを大切に守りたいと思うのは、人として当然の感情である。

時々、こんな問いかけをされることがある。

「もし日本と朝鮮半島の国家の間に戦争が起きたら、どっちの味方をするのか？」

朝鮮半島の国家に加担すれば、その瞬間から敵性国民として抑圧されるだろうし、日本の味方をすれば、本国の同胞から裏切り者扱いされるだけだ。

だから、答えはどっちの味方もしない。もし戦争が起きたら、「そんな愚かなことはやめろ」と日本と朝鮮半島の間に割って入り、諫める側に回る。それが在日の立ち位置だと、僕は考えている。

いまだに多くの在日コリアンが外国人としての地位に甘んじて日本で暮らしているのは、けっして韓国や北朝鮮など、本国への忠誠心が高いためではない。

単一民族性を重視する日本ではマイノリティの文化的多様性を認め、社会に包摂する統合プログラムは準備されていない。そのため、日本国籍を取得しても同化を強要されるだけで、祖先から継承してきた文化や言語などを維持する手立てがない。その不安、不満が在日コリアンに日本国籍の取得をためらわせている。

在日コリアンは日本、韓国、北朝鮮という三つの国家ナショナリズムに細分化され、周縁化されてきた。だが、そんな生き方はもう懲り懲りだ。日本国籍を取るために帰化をすれば、同化を迫られる。かといって外国籍を維持したままでは、自分が暮らすこの社会に市民として参画できない。

たとえば、選挙。僕は生まれてから一度も選挙というものを体験したことがない。参政権を行使したことがないのだ。高校三年生の時に、生徒会の役員を選ぶ選挙に一票を投じたきりだ。それ以来、僕は選挙というものに縁のない人生を送っている。自らの意思で政治代表を決める術のない人間を、はたして十全たる個人と呼べるのだろうか？

そこで、日本に外国人として生まれ、半世紀以上の歳月を過ごして来た僕は考える。国境や国籍、国家イデオロギーに切り刻まれずに、人が十全たる個人として生きて行く方法はないのだろうか。

在日コリアンが国民国家に抗して、個人として自立するためには、日本による植民地支配と戦後の同化教育のなかで失った自尊心や民族・文化的資質を回復する一方で、日本と朝鮮半島に渦巻く過剰なナショナリズムや国家意識を相対化するトランスナショナルな視点が欠かせない。

そこから導き出される解答はひとつしかない。それは日本、韓国、北朝鮮の境界をまたいで生きることである。それは日韓朝、どれかの統一された国家アイデンティティに拠るのでなく、そのハイブリッド性を活かして複数の国家領域にまたがり、自己実現を図るディアスポラの戦略と呼んでもよい。

僕は在日コリアン三世だ。朝鮮半島から日本列島へと越境的移動をしてきた民の子孫である。そのため、僕の体内には日本と朝鮮半島にまたがる越境的なアイデンティティが息づいている。そんな僕にとって、ひとつのナショナルアイデンティティのみに充足して生きるのは苦痛以外の何物でもない。日本、朝鮮半島にまたがる複合的なアイデンティティを生きること——「またがりビト」として生きることこそが、よりよい人生を生きることだと信じている。

以下に記すのは、「またがりビト」となるべく、僕がここ十数年間、考えたり、取り組んできたことの覚えのようなものである。

第一章に、いま問題となっているヘイトスピーチに対するマイノリティの視座を、第二章に、セルジオ越後さんから日本に住む外国人といっしょに、日本社会へのラブコールとして実施したサッカーワールドカップ(W杯)でのボランティアの顛末を、第三章に、トランスナショナルな学び舎をめざして建学したコリア国際学園のチャンレンジを、第四章に、マイノリティだから

こそ感じる日本の原発体制と新植民地主義の近接性を、そして第五章では、「多文化共生」という外国人包摂のアイデアへの希望と批判について綴ってみようと思う。

立ち止まる。考える。生きること。私たちのこと。

シリーズ「こ」で生きる 全10冊

◆ 中澤正夫

本体一九〇〇円

◆ 死のメンタルヘルス——最期に向けての対話

◆ 横湯園子

本体一九〇〇円

◆ 魂への旅路——震災から震災へ

◆ 朝霧 裕

本体一九〇〇円

◆ バリアフリーのその先へ！

——車いすの3・11

◆ 山崎光祥

本体一九〇〇円

◆ 子を見ると、子を見取るとき

——沈黙の命に寄り添って

◆ 遠藤比呂通

本体一九〇〇円

◆ 希望への権利——釜ヶ崎で憲法を生きる

◆ 山田 真

本体一九〇〇円

◆ 水俣から福島へ——公害の経験を共有する

◆ 姜 誠

本体一九〇〇円

◆ またがりビトのすすめ

——「外国人」をやっていると見えること

◆ 笠 耐

◆ ある昭和の家族

——「火宅の人」の母と妹たち

◆ 最相葉月

れるられる——支えあう人生

◆ 内山 節

いのちの場所

四六判・上製 各巻平均200頁

◆は既刊 ◇は次回配本予定

岩波書店刊

定価は表示価格に消費税が加算されます
2014年11月現在

目次

はじめに――またがりビトになりたい

第一章 ヘイトスピーチと在日

むき出しの憎悪／在日化するニッポン／不安のドミノ／嫌悪と被害感情／ターニングポイントとは二〇〇四年／派遣法改正と不法残留者半減プラン／差別は慣れっこ／繰り返されるヘイトクライム／法規制のあり方／ロサンジェルスで考えたこと

1

第二章 在日外国人でボランティアをやってみた！

三國人発言／セルジオ越後さんのひと言／リヨンでもらった水／行政の反応にへこむ／リスクをかぶってくれた日本の友人たち／四タイプのボランティアたち／胃の痛む日々／うれしい知らせ／ラブコール届いたかな？

59

第三章 学校を作ってみた！

円卓会議／金敬得さんからの電話／「建学の精神」をひねり出す
／理事はノーギヤラ／校舎がない！／末っ子がK I S生となる
／ささやかな一石

99

第四章 マイノリティと反原発

近接する植民地支配と原発体制／「異形」の光景／重なる植民地
の風景／自らが望んだという言い分／「領土なき植民地」支配
／迷走する除染／除染ナシヨナリズム

137

第五章 多文化共生の在りか

地方発の多文化共生／逆行する国の外国人政策／ブラジル人に突
きつけた「金をやるからもう来るな」／いつか見た光景／移ろう
入国管理局の主役たち／日本だからこそ、地方参政権が必要／東
アジアアイデンティティ／とば口にさえ立っていない日本

165

おわりに
195

装画Ⅱ角田正之
装丁Ⅱ後藤葉子